

如 泥

名語記私解・続

工 藤 力 男

はじめに

『名語記』十卷は、鎌倉時代の建治元年、稲荷山の經尊法橋から北條実時に献上された語源解釈書である。本稿は、その残存する八巻によって日本語史を考える試みの一つである。副題は、その最初の試みである前稿「名語記私解」を承けるの謂である。前稿、工藤（一九九三年）では、これを語構成の書と見ることによって、イチビル・イロコフク・イバヤル・ハユという四条五語をめぐる思索の道筋を綴り、經尊の方法の一端を探ったが、本書全体への見通しを十分に述べるには至らなかつた。言わば各論からはいったことになる。そこで順序は逆になるが、ここに総論の一節を記し、あわせて本書を契機にして、今昔物語集の一つの文字「泥」の訓をめぐる断

想を述べようとするものである。

以下の記述は北野克氏の写本を活字に移した勉誠社版により、必要に応じて所在ページを括弧内に示す。引用に当たっては番号や符号をつけたりする。途中の省略は点線で示す。

一 語分類の基準

名語記の語分類法に対する関心は、これが日本語の文法意識史に関わるものであるだけに、諸氏が共通に寄せたものであった。まず、岡田希雄（一九三五年）が基本的な分類を「ナ・コトバ・テニハ」の三分類と指摘して以来、特に中山緑朗（一九八五年）が詳しくそれを論じている。岡田氏の指摘は適確であるが、すでに言われているように、本書の分類基準にはいぶかしい点が少ないので、それを確かめることから始めようと思う。まず、「名」とされているものから見る。

- 1 草ノ名ニエアリ（二〇二）
- 2 国ノ名ニワカサヲ若狭トカケリ（二〇八）
- 3 小鳥ノ名ニウソノ如何（四六三）
- 4 官途ノ名歟 チシノタレカシトイヘリ（一九四）

右には対象の性質が違うものを挙げた。植物、固有名詞、動物、官職であるが、その「名」の内実に差はないと言つていいだろう。1で言うのと、あまたある草のうちの一つを指す「エ」という語を問うことが目的なのであり、

以下も同じように国名の一つの「ワカサ」、小鳥の名の一つの「ウソ」、官名の一つと考えた「チシ」という語の由来を問うものである。言わばここに問われているのは包摂判断の間である。このように「名」を直接尋ねる項目のすべてを数え挙げたわけではないが、恐らく百を超えることはないだろう。和語を「ナ・テニハ・コトバ」の三つに分けてその語源を解こうとする本書の目的からすると、あまりにも少ないという気がする。その他の語はどのような形式で問われているのだろうか。

5 乗物ノウマ如何(四六九)

6 乗物ノコシ如何(六二二)

7 魚ノコヒ如何(六二五)

これらは、問の形式は1~4のそれと異なるが、その意図は変わらない。幾種類かある乗物のうちの一種類である「ウマ」と「コシ」、魚の一種の「コヒ」は、それぞれ何ゆえにかく名づけられたかと問うているに違いない。つまり、先の四問と同質なのに、形式、用語の使用は一定していないのである。「名」を尋ねる項目が少ないのはそのような事情によるようだ。次の例はどうだろう。

8 去年ヲコソトイヘル如何(六〇六)

9 米ヲコメトナツク如何(六二二)

泥 如
これらは1~7とは質問点が異なる。去年の一つに「コソ」があるのではないし、米の一種類に「コメ」があるというわけではない。去年すなわちコソ、米すなわちコメというのはなぜかと問うているのである。これらは言わば同一判断の間である。

- 10 水ニスム ウヲ如何(四六〇)
- 11 魚ツルニウケト云物アリ 如何(四七〇)
- 12 天ヲアマトナツク 如何(六四五)
- 13 野ヲノラトイヘリ(四八二)
- 10・11のような問も多い。12・13は同語反復と見える問だが、著者は語形が異なるものは別語として解こうとしたのである。以上のいくつかの類いを、著者があえて区別する意図はなかったと言つていいと思う。
- 著者が「名」としたものは、中山氏が言うように、おおむね「具体的な形態を備えたものに与えられた名称」となりそうだが、地名や職階などは形態ではないので、「対象をこれと指し示すことができるもの」とすべきかも知れない。確かに「代、世」のような抽象的概念もまれに含むので、ここでは、広義の体言を指すとする以上のことは言えないようだ。
- 次に、コトバ。これは、「コトバ」と仮名書きするほかに漢字表記の「詞」があり、まれに「語」も見える。漢字表記の二者も「コトバ」と同一と見ていい。さてどこでもいいのだが、例えば巻第四の冒頭から、コトバ・詞・語を出現順に拾ってみよう。
- 14 イタイケシタル物ヲワリナシトイヘル ワリ如何：詮スルトコロチヒサキヲ愛スル詞ナルヘシ(二三五)
- 15 道ヤ浜ナトノスクニモナキ所ヲタトイヘリ如何 ワタハ和多トカケリ ヤハラキ オホシノ詞也(二三八)
- 16 コレカハ カレカハトウタカヒ タトル詞ノカハ如何(二五二)
- 17 詞ノスエノアラマシカバ シラマシカハナトイヘルカバ如何(二五二)

- 18 詞ニイミシカホ シソセカホナトイヘル カホ如何 (二五二)
- 19 夢ニモカヘニモトイヘルカベ如何 コレハツヤノミスシラヌ心地ヲイハムトノ詞也 (二五三)
- 20 トチモカチモトイヘル詞ノカチ如何 (二五七)
- 21 人ノ許ノ詞ニソレカリ タカリトイヘル カリ如何 (二五九)
- 22 カレコレトモニハナヌ詞ヲカヌトイヘル如何 (二五九)
- 23 足ノカタワナル物ヲアシカ、トイヘリ如何 答 アシカ、マリトイヘル詞ノオホケレハハアシカ、トイヘル也 (二六二)
- 24 ヨカレ アシカレトイヘル詞ソカレ如何 (二六六)
- 右の挙例からもうかがわれるが、最も多く出現するのは「詞」であろう。綿密に数えたわけではないが、「詞ニヨカム也 アシカムナリトイヘル カム如何」(二七七)のように、初めに「詞ニX」と提示して「如何」と問う形が最も多い。右の挙例では18を典型とし、その変形の17・22、あるいは20・22・24の類いである。これらの多くは、アラマシカバ、イミシカホ、ソレカリ、ヤカムナリというように、あるいは複合語、あるいは文節、あるいは20のような成句である。この20の類いは、「詞ニタカスムヤトナトイヘル タカ如何」(三三二)のほか、「人持タル物ヲ所望スル詞ニタベトイヘル如何」(三二八)、「小兒ナトヲヲトス詞ニソメノトイヘル如何」(三七二)、「人ニハシメテイヒヨル詞ニコレヲツナトシテトイヘル如何」(三八五)のような具体的な状況を限定した発話まである。ここで、著者はかなりはつきりと「詞」の内容を自覚していると言っている。したがって、「小兒ヲモリフスル時ノ詞ニネ、法師トイヘル ネ、如何」(四〇五)の「ネ、法師」は、寝かしつける時の呪文のような句であ

って、「名」とすべきものを誤認したのではあるまい。

右の挙例は動詞・形容詞・助詞・名詞・副詞・接尾語の類いであるが、さらに範囲を広げると、従来言われているように接続詞・接頭語・助動詞・感動詞も拾うことができる。中山氏は、「詞」が名詞を指すばあいも少数ながら存在するとして、「目ノ上三オヒタル毛ヲマユトナツク如何」(五五七)を挙げる。品詞として見ると、15・18・19は名詞であるにかかわらず、「名」とされなかったのはなぜか。思うに、これらはその物を問うているのではなく、15は「わだ」と呼ばれるような地形を、18は「いみじがほ」と呼ばれる表情を、19は「かべ」に突き当たったような心の状態を、つまりいずれもある状態を問題にしているように思われる。これらは具体的な形態でもないし、土地や職階のようにこれと指し示すこともかなわぬ事柄であって、やはりコトバとするのがふさわしいと考えたのだろう。もつとも、「前後ノチ如何」(四七九)のように、名ともコトバとも明示しないこともあるのだから、分類傾向というくらいに理解するのがいいのだろうが。

終りに「テニハ」。この用語は、中山氏によると九回表われるという。そこで言及された語を抽出すると、重複もあつてわずか「ト・バ・ニ・ハ・テ」の五つに過ぎない。ここでバとしたのは、原文ではハであるが、「サレハヨトイヘル ハヨ如何 答(欠損あり) テニハノハ也 ヨハイノ反」(二三)から、バヨと解釈していいと判断したものである。中山氏は「格助詞・係助詞の類が中心になっている」というが、その九項目に限れば、接続助詞「テ・バ」、格助詞「ト・ニ」、係助詞「ハ」ということになる。もつとも実際の記述を見ると、その片仮名宣命書きによって、著者の考えていたテニハが広がること言うまでもない。ガ・ノ・ヲ・ヘ・モ・カ・ヨリ・マデ・コソ・ナドを拾うことができる。ただ、いま見ることのできる活字本がいかほど正確に原本の姿を伝えてい

るか不明である。例えば、「カホナトヲノコフヘキ物ニヤトオホユ」(六二三)のような例もあつて、おおよそのことしか言えないのである。また、右に示したようにサレハヨのハがテニハなら、それに承接するヨは何かという問題に逢着するのだが、著者は別の箇所で、「サレハヨトイヘル サレ如何 コレハシカレハヨ也 シカノ反ノサ也」(六七九)と述べ、ヨを小書きしてテニハと見ている節がある。厳密にその範囲を読み取ることとはできないと結論するほかあるまい。

それにしても、著者がテニハとする語はいかにも少ない。そこで、最初に登場して二条に分けて説明されている「ニ」を手がかりにしよう。まず「コトハノスエニヤケル コレニカレニナトイヘル ニ如何」(二二〇)という問に対して「ナミノ反ハ ニ也 並也 対揚ノ事アル時イヘル歟 又ナリヲ反セハニ也 ナリハニアリトモイヘリ」と解いている。「並也」の意味は分明でないが、類似の物事を並べあげるときに用いる「ニ」を指しているのだろう。続いて「物ヲコ、ニ候 カシコニ候ナトイヘル ニハ所ヲサシタルヨシニキコエタリ 如何」(二二〇)と問い、「カノニハナリノ反 ナリハニアリヲ云ヘル也 ヒロクイヘハニアリ 中ニイヘハナリ ツ、メテイヘハニトナル也」と答えている。「候」が下接した形で問い、母音の縮約現象に言及しているので、「候」はいわゆる存在詞相当と考えていいだろう。いずれにせよ、前者は関係語である格助詞を概念語で解くものであつて、ここから助詞の認定基準を読み取ることは不可能である。

他の助詞では認定基準の読み取りが可能だろうか。ニをテニハとしながら、類義の助詞であるにもかかわらずテニハとしていない「へ」の扱いを見よう。そこには、「人ヲヨフ詞ニコレヘ カシコヘナトイヘル へ 如何 コレハフレヲ反セハへ也 コレヘト請スルハアヒフル、ヨシ也」と奇怪な解釈を施し、さらに「又云 辺ヲハ

ヘトイフハ、コノ辺ヘトイヘル心モアリヌヘシ」(二二五)とある。「辺」の漢字音と関連づけており、和語「辺」の意味が抽象化して助詞に転じたとするわれわれの通説からは遠いところにあつて、有益な手がかりにはならない。引用は省くが、やはり類義関係にあるヨリとカラも似たり寄つたりである。

それでは、テニハの解釈が全て荒唐無稽かというところ、そうでもない。サヘを見ると、「サヘハシカウヘノ反然上也」：万葉ニハ副ノ字ヲサヘノ所ニカケリ ソヘカサヘトイヒナサレタル歟トイハレテキコエ侍ヘリ」(六六七)と解いている。この「万葉」以下の記述は現代の理解のかなり近くまで来ていると言つていいだろう。かかる解釈に達したのはなぜか。それは、副助詞の多くが概念語から意味の抽象化が進んで成立したと推定されるからで、関係語を概念語で解こうとする著者の方法が、この語の由来と偶然に一致しただけのことだろう。当然これがいつも有効とは限らない。現にマテを見ると、「マテハ至于トカキテハイタルマテ 及于トカキテハヲヨフマテナトヨメリ」：万葉ニハ左右トカキテマテトヨメリ 左右ハ真手トイフ義也：左右ノ手ニテスル事カマテニテハアル心地也」(五五三)と、源順が石山寺に願掛けして読みえたという、かの萬葉集の表記に着眼しながら、その意味を理解することはできなかった。他の副助詞では、ダニはツラナミ、スラはソフレハ、サヘはシカウヘ、ノミはナラマシの反などとそれぞれ解いており、やはり概念語に還元できるとしているのである。

もう一つ、著者がテニハとするテを見るとしよう。「ミテ キ、テトモシテナトモイヘル テ如何 トメヲ反セハテ也、心ノ心也 ハテ ヲハル心也 トケヲ反セハテ也 遂ル義也」(二〇五)。複合助詞についての解釈もあつて、つごう四箇所に記述があるが、一つ見れば十分。言わんとするところは、果て終わる意味、「遂ゲ」の反というのだろう。文脈によつてはそのようにも用いるだろうが、特定の用法を文法的な意味とするのはもとより無効で

ある。かかる方法の典型は疑問の助詞ヤに関する解釈だろう。すなわち「アリヤ ナシヤノヤ如何 ヤハ乎也 哉也 耶也 イサノ反歟 シラサル義也 不審スル心地也」(八四)は、不審の意を表わす感動詞イサの反でヤの語源を解くのである。こう見てくると、著者の語の分類、なかなしくテニハの認定に確かな基準が存在したと認めることは、到底不可能だという結論にならざるを得ない。

かかるテニハ類については、何ゆえに助動詞の類が排除されたのかという問題もある。中学校の文法で扱ういわゆる広義の助動詞は、事柄の客観的なありようを表わす詞性の強い語から、話し手の認定を直接に表わす辞性の強い語まで各層の助動詞を含み、それは相互承接において用言からの距離と密接に関連する。経尊の扱いを具体的に見るとしよう。助動詞を一覧するには西田直敏(一九八八年)の資料が便利である。

「詞ニトラル、ヒカル、如何 答 ルハラルノ反 重テイヘハル、トナル也 又云 ラルレルノ反」(二二)は、ル・ラルが同じ語の異形態であるらしいと感じながら、別語として解こうとする意図が見られる。そして、「カヘリテヨマル、ラルノ字ノ心如何 被也」(四三三)の「字」は漢文に基づいて説こうとする。「シム」についても同様で、「セシムノシム如何 シムハ令也」(七七七)とある。したがって、同じ詞的な助動詞でも、漢文を背景に持たない「サス」は「詞ニミサセ給 ツケサセ給ナトイヘル サセ如何 答 シラシメヲ反セハサセトナル也」(七〇三)というような限界をもつのである。それでも、ル・ラル・シムについては漢文を意識するのだから、用言、なかなしく動詞から切り離れた説明も可能であったはずだが、実際はそうならなかった。他の助動詞についての記述を見ても、その理由は明らかにしがたい。あるいは、助動詞とせずに動詞語尾の一部とする、「複語尾」説のさきがけと見るべきかもしれない。

関係語の個々について時に鋭い発言があることは、例えば助詞のノとガの使い分けと動詞ナメクをめぐる漆崎正人（一九八七年）があり、助動詞キとケリの意味の違いを意識した記述については西田氏が指摘している。一般に助動詞の意味や用法の違いをうかがわせる記述は、この時代の人の言語意識を知るうえで貴重なものである。西田氏の一覽表には簡潔な解説が添えられて有益だが、中には肯じえないものもある。

アンナリ ナカンナリのナリ如何 キ、ヲヨフコト 詞ノナリハニヤラシノ反 ニヤレリ同 ニヤトハサカトイヘル心ナリ 又ニアリノ義ヲナリトイヘル歟（四一四）

西田氏はこれを「ナリ（断定）」の項に入れ、続く「ナリ（伝聞・推定）」の項で次のように述べて例を挙げる。

終止形接続の「ナリ」は伝聞・推定の意とされているが、経尊は連体形接続の「ナリ」（断定）と区別していないようである。次の語例は終止形接続の「ナリ」である。

ミユナレ キクナレ キコユナレナトイヘル ナレ如何 コレハニアレ也 又 ナレハニヤラセノ反（四一八）

確かに終止形に接続した三つの語例を挙げているのだが、反切「ニヤラセ」の「ヤ」が疑問の助詞らしいと判断しうることから、その語の意味についての経尊の認識をうかがう以外に術はない。それにひきかえ、アンナリの項の要点は「聞き及ぶこと」「ナリはニヤラシの反」「ニヤとはサカといへる心なり」にまとめることができるので、伝聞・推定の意味を明確に汲んでいたことを十分に知りうるのである。すなわち、ラ行変格活用語の撥音便形からナリに続くものを、伝聞・推定と処理しているので、終止形から接続するという規範がこの時代になお生きていたらしい節がうかがえるのである。ただ「ミザムナリキカサムナリトイヘル サム如何 ミスアムナリ キカサムナリノスア反リテサトナル也 サテサムナリ也 サル也ヲサムトイヘル也」（六八五）の傍線部の記述は、同

じラ変のザリが連体形に接続したと解釈されるので、若干の問題を残すことになる。

著者はテニハが漢文訓読に由来することも知っていたらしいにもかかわらず、助動詞の類いを含まなかったのはなぜか、諸氏の探索にもかかわらず不明である。その解明は後日を期するほかない。

二 孤例と初出例

名語記は語源解釈にはほぼ無効だが、語構成を考える手がかりを得ることはある。その点は前稿でも述べた。そもそも、日本語の系統が不明な現状で日本語の語彙の語源を解くことは本来無意味なことなのである。岡田氏が述べるように、本書の最大の価値は、鎌倉時代語の提供に置くべきだとわたしも考える。写本を作った北野氏が繰り返し称揚するように、本書によって日本語史上に初めて存在が確認された語は多く、本書が最古の用例を記載している語もまた多いのである。そうした視点から本書の特徴を検証しておこう。

『日本国語大辞典』（以下、『辞典』と略記）が本書からほとんど網羅的に採録したことは編集後記に述べられている。確かに少し丁寧に読むと、出典として名語記の名が頻繁に目にはいる。本書によって鎌倉時代までさかのぼることになった語は相当な数に上るだろう。ここではその初出語の傾向を知るために、明らかな音象徴語、すなわち狭義の擬声語は除いて少し挙げてみる。著者の説明は省いたり、括弧内に通用の漢字を（適当な漢字がないときはアステリスク）記し、あるいは語性を示す。

如

泥

タコ（胼胝） ㊦アラワサシタル手ナトニ節ノイテキタルヲタコノイテキタルトイヘリ如何（三四三）

ノサ(*) Ⅱノサ也トイヘル詞ノサ如何…ノサハ叙ノ字也 ノヒサマノ反ニサヲサトイヘル歟(四八四)

ブナ(樺) Ⅱサルナメリトイヘル木ヲハフナトイヘリ…ハタヌメノトアル也(五八五)

サコ(追) Ⅱ山ノハサマヲサコトナツク如何 サコハセハクホノタニノ義ニ同歟(六九四)

ノサは今でこそ常用されないが、中世以後の民話などによく用いられた言葉であり、サコは俚言とは言えないくらい広く用いられる地形語である。そのようなごく普通の言葉の初出が本書までさかのぼるのである。

以下、今も生きている若干の語を簡潔な形で示し、『辞典』が本書の次に掲げる出典を見ると、コケル(瘦る)・コセコセ(擬態語)は史記抄、シナブ(萎ぶ)は浄瑠璃「心中宵庚申」、シビル(痺る)は洒落本「美地の蛎殻」、クスグル(擦る)は人情本「春色梅美婦禰」といったぐあいである。これらの語に、わたしは俗語の匂いが強く感じられてならない。少なくとも平安女流文学などの語彙とは異質で、名語記が初出文献になるのも肯けるのである。さきのノサが「叙ノ字也」と説かれて「伸す」と同根と思われるのに、遂に漢字表記を獲得することがなかったのは、俗語性を払拭しえなかったからではないか。なお、シビルはチビチビの語基と混交して、チビルに姿を変えている。

次に、今は用いられない語の若干について『辞典』の漢字表記を掲げ、本書に次いで古い出典を挙げてみると、
 アクチ(*) Ⅱ日葡辞書、ウナメ(牝牛 Ⅱ日葡辞書、オモクサ(面瘡 Ⅱ運歩色葉)、クマム(隈む Ⅱ辛若舞「小袖乞」、コダル(*) Ⅱ田植草紙)、コヅム(偏む Ⅱ史学大成抄)、シルシ(汁し Ⅱ日葡辞書)、スリノク(擦り退く Ⅱ仮名草子「悔草」、セコム(責む Ⅱ浄瑠璃「佐々木大鑑」、ヒストラコシ(*) Ⅱ日本永代蔵)などである。その大半に対してわたしはやはり俗語臭を感じるのである。なお、ウナメの項目を『辞典』が「又うしをうなめとなつく」とするが、冒頭の字

は片仮名の「メ」を誤読したのでらう。

右に挙げたのは初出の時代が本書によつてさかのぼることになった語であるが、さらに積極的に、『辞典』に本書の用例だけしか挙げていない語、名語記の記載がすなわち文献上の孤例として扱われた語を少しばかり指摘しておくことも無意味ではあるまい。『辞典』の記述を主に引用し、名語記からの引用は括弧内に示す。

ネソ(四〇四) 刈芝・薪などを束にするのに用いるクロモジの皮・マンサクの皮・フジヅルなどの総称。

ムタ(四四二) 草の生い茂つた沼。

ウツ(四六四) けものみち。

ヤイ(五二五) 築。

コツ(六一〇) 打つ。ぶつ。

アマ(六四六) (民ノ家ノ火タクウヘニツレルタナヨアマトナツク)

モケナシ(八二四) 会釈がない。挨拶がない。(人ノ会尺モナキヨモケナシトイヘル)

スケグチ(八四六) 上唇よりも下唇の方が前に出ているもの。うけぐち。

メバチ(一〇六二) ものもらい。麦粒種。

セクル(一一三九) せきたてる。責める。(人ヲセクルトイヘル如何 答セメカスレルノ反シハセクル也)

クサメク(一二五二) 人が集まつて来て、その数が次第に多くなつていくことをいう。(カスシナミエケクノ

反 人ノアツマリテクサメク心也)

如 右の語群を見て、孤例という指摘に不審感をいだいた人が多いに違いない。わたしにとつても例えば、ムタ・メ

バチは耳慣れた語なのだから。じつは、これらは『辞典』が名語記以外の用例を方言とした語なのである。方言あるいは俚言の認定はたちばによつて揺れるので、そのことを議論するのは無駄であろう。わたしの言いたいのは、名語記に登録された語には、このように方言として生きているものが多いということである。それは、さきに述べた、初出例の中に俗語とおぼしいものが多いことと照応するのではあるまいか。そのように見ると、なお一つの傾向が見えてくるようだ。

エラメカス^{||}エラハエセラヤノ反(二三七二) たいしたものでもないのに、偉そうに見せる意か。

ハラカス^{||}不審ナルコトヲハラカス如何(二一七三) 疑念を晴らす意であろう。

ヲラカス^{||}恐レカス也(一一九〇)

テテヤカ^{||}オホキナル物ヲテ、ヤカトイヘリ如何(二二六八)

ヅハシタナシ^{||}アラ、カナルコトニヅハシタナシトイヘル如何(六三三)

初めの三語は、使役的他動詞を形成する肥大接尾語のカスが付いたものである。これは平安時代以来さかんな口語派生法で、現在も見られる。それらは臨時の語形と見なされ、辞書に登録されることが少ないのだが、実際には多く行われたに違いない。本書では恐らく俗語への関心からそれらも積極的に収録した結果、今こうして見ることができのたろう。基になった動詞を漢字表記して同類を挙げると、トリスヘラカス(取り滑る?)・アソハカス(遊ぶ)・フケラカス(耽ける)・アヤカス(*)・ヘ、ラカス(*)などである。

テテヤカは初めの二音節がエ列音であることも珍しいものだが、そもそもこのヤカという接辞も臭い。初出例の方にもタシヤカ(確)があるほか、タハヤカ(撓?)・ノトヤカ(長閑)・ニホヤカ(匂)などが見える。最後の

ニホヤカについては「コノニホハニホヒヤカトイヘル義歟」(一五三)とあつて、本来ニホヒヤカであつたとおほしい。別に「シタヤカ シタ、カナトイヘル シタ如何」(七七二)という項目もある。いわゆる形容動詞語幹の形成の主たる接辞は「カ・ラカ・ヤカ」であるが、相互に侵蝕したことはよく知られた事実で、新しい語形が旧語形の地位を脅やかすこともあつた。その地位を奪いえなかつた語は遂には俗語、臨時的な語として消えざる運命にあつた。それらの語が経尊によつて書きとめられ、一時の存在を主張しているのだらう。

最後のヅハシタナシは、語義も語構成もほぼ明白である。ならば、語頭の「ヅ」は何か。ヅブトイ・ヅヌケタ・ヅナイなど、飛びぬけた状態を指し、あるいはベジヨラティブを形成する接頭語と見ていだらう。従来かかる「ヅ」の初出文献に史記抄が挙げられてきたが、この用例が確かなものならば、二百年以上もさかのぼることになる。この接頭語は長呼されたヅウの形でも、ヅウヅウシイ・ヅウタイなどと用いられた。すると、ほぼ同義で用いられたド・ドウとの関連も考えられる。このド・ドウは十五世紀半ばの抄物までしかさかのほれない語であつた。それらの関係を解く準備も時間もわたしにはないので、これを指摘するにとどめ、それと二百年前の名語記の「ヅ」とを結ぶ材料が出現するのを待つとしよう。

以上、執拗なほどに卑俗な語や生業に関わる語を指摘してきたが、かかる語彙への著者の関心を端的に語るのには、下臈についての言及であろう。著者は下臈の詞や生活にかかわる語を三十ほど拾っているのである。

- 1 下臈ノ詞ニワサト、イフヘキシニヤクト、イヘリ如何(五三二)
- 2 下臈ノ詞ニオホカル物ヲエラアルト云ヘリ如何(六三二)
- 3 下臈ノコレミロトイヘル如何(七四五)

これらは下藹の用いる言葉をじかに対象とするもので最も多く、十ほど見える。

- 4 下藹ヲヲレカトイヘリ如何(二二九)
- 5 下人ニ物イヒキカセムトスル時 ヨナトイヘル心如何(三二五)
- 6 下人ヲイフ詞ニナレ如何(四一八)
- 7 下人ヲヨハフニヤレコトイヘル如何(九一九)
- 4の「下藹ヲ」は「下藹ノ」の誤りではないかと思われる。少なくとも他の三例は下人に対する著者の言葉遣いがうかがわれて興味深い。

- 8 下藹ノ髪ヲシ、ケトイヘル シ、ケ如何(二〇二)
- 9 下藹ノハキ物ニゲ、如何(五七二)
- 10 下藹ノ足ニツク コヒ如何(六二五)
- 11 下藹ノハキノマタラナルアマメノツキタルトイヘリ如何(二〇〇四)

この類いは下藹の住居、持ち物、身なりなどに関するものである。10は垢を指すコビとおぼしく、今なお各地の方言として残っていることから推して、階層によって使用語がアカとコビとに分かれていたのかも知れない。アマメは『辞典』に名語記を孤例とするものだが、これも全国に広く分布する方言でもある。

1・2は今も関西では用いられる言葉であるが、一方、3の「ミロ」とその類例「セヨトイフ心ヲセロトイヘリ如何 答セロハ田舎ノ詞也」(八二八)は不審である。一般にサ変動詞と弱活用動詞の命令形には、西国ではイ／ヨ、東国ではレ／ロを付けると説かれる。著者の接することが多かった下藹の中には、あるいは東国にゆかりのある

人もあつたのだろうか。その下藪のいわば特殊な表現を一般化したのか、それとも日本の中央部にもそれが行われていたということなのか。かく言う理由はほかにもある。

12 下藪ノアラオカナトイヘル何事ニカ如何 コレハヲカシノ義也 オモ カラ ナヤノ反歟 カルノシケン
ルライフ事也 (八八八)

活字本に「オカナト」とあるが、反切はオカナを対象にしているので「オカナト」に訂正した。アラに反切がないのは、これが「アラ・オカナ」という《感動詞・形容詞語幹》の構造だからである。その形容詞は当然「オカナシ」となるが、越谷吾山が『物類称呼』で「おそろしはし；駿河辺より武蔵近国にてをつかないといふ」と指摘したように、これは東国方言とされており、文献上の所見とも矛盾しない。かくて経尊が下藪と呼ぶ人はあるいは特定の個人を指すことがあるのではないかと疑われ、本書の対象とした語の性質を考える際に留意すべき点だと言えらるだろう。

『辞典』に方言という記述さえないもののうち、わたしが特に強い関心をいだいたものを少し挙げよう。これこそ紛れもない孤例ということになる。個々の語についての説明は省略する。

アエ人 (肖人)

アクナノ (くわしくい聞かずさま)

アタニ (新たに)

アトム (物事を詳しく調べる)

キリム (速める・急ぐ)

クセブ (曲ぶ)

サイトイ (先日)

ススミチ (直道)

チナキル (中から断ち切る)

フハム (柔らかくふくらむ)

マナキル (擬する)

マヲ (真青)

ヤニヤニ (脂脂)

泥 如

『辞典』は「スネキ(拗氣)」という見出しで、名語記の例「人ノ心ノスネキ」(八四三)だけを挙げる。それとは別に「すねい(拗)」の項目を立て、文語形「すねし」として虎明本狂言を初出例とする。名語記ではキを氣で解くこともあるが、スネキは形容詞の連体形と見て不都合はなく、スネシの初出例になるはずである。

右には、『辞典』に採録された語を対象にして、名語記の価値を称揚すべく紙数を費やしたが、この『辞典』にも漏れたのではないかと思われる語も少なくない。すなわち、初出例になるはずなのに採録されなかったものである。氣付いた語の一部を掲げ、適宜私見を添える。

サチハヒ人ノ身ニサチワイトイヘル サチ如何(六六九) サチ(幸)の干涉による混交形か、訛りか。

秋サレ・冬サレ(六七九) 連歌用語。従来、宗砌あたりを初出とする。

シヘハレ物ナトノシヘタリトイヘル シヘ如何(七六三) 四国では今も用いられる。

ヒスシモノ、アチハヒノヒスシトイヘル如何(八一七) 人の性格に言う近世語のヒスシとは別語か。

セグ人ニセギカ、ルセグ如何(八三四) 『辞典』に、体で押す、混み合う、の方言として見える。

アヤツ小児ノヒタヒニカク アヤツ如何 答犬也(二〇〇二) 何かのまじないだろう。

シハラクサシシハラ クサシトイヘル シハラ如何 シトハラクサ也 小使ノ所也(二〇八〇)

ヤカナフヤカナフ如何 ヤカタナラハムノ反 屋形成ハス也(二二五四) ヤに反切なく未詳の語。

コソハユキモ ソコ ヒカヤクの反(二二六五) 『辞典』は四河入海を初出とする。コソハユシか。

続いて、その語が項目としても立てられていないもの、すなわち日本語として『辞典』に見えない語のいくつか。これらこそ、本書の価値を最も高からしめるものであろう。もつとも、対象とする語の形態と意味が確定で

き、望むらくは用例を得て初めて辞書に登録すべきものだろうから、『辞典』が採録しないのはそれなりに意味があるのかもしれない。しかし、一辞書の例だけで登録する語も多いのだから、これらの語を採録しなかつたわけは明らかでない。

ネツ_ニネイリタル人ノクチョリタルヲネツトナツク如何(四〇四) 「寝唾」の表記が可能な語だろう。

フテタリ_ニコエフトリタル物ヲフテタリトイヘル フテ如何(五八九) 「太たり」ということか。

人サリ_ニ人モナキ家ヲ人サリモナシトイヘル サリ如何(六七〇)

シラ_ニ双六ノカケサルヲシラトナツク如何(七七五)

コバフ_ニ人ニシタカヒ ウヤマフヲコハフトイヘル如何(九五四) 「媚ぶ」の再活用形だろう。

コネル_ニ人ノアツマレル マヘヲコネル如何(九六三) 「小練る」か。

ノレモノ_ニ人ノフルマヒニノレモノトイフ ノル如何(四八〇) ノレアリク(三六九) 放蕩を意味する「のら」

とつながる言葉であろう。

以上、縷々並べあげた語はわたしの気付いたものの一部にすぎない。それでも本書が日本語史を考える上で有益であることは推察されるであろう。これらのほかに、何とも意味が取れない語はじつに多い。仮名遣いの混乱を反映するらしい語、濁点がなくて語形の確定しえない語も多い。それらは未詳ということは無視するのではなく、われわれの脳裏にしかと刻んでおく必要がある。いつなるとき具体的な用例を得て動き出すか知れないのだから。その意味でも、本書の活字本が体裁・索引の両面で、使いにくい本であることが悔やまれる。

けだし、名語記は鎌倉時代語の貴重なレキシコンである。

如 泥

三 泥の如し

今年、わたしのゼミナールでは、九州大学萩野文庫蔵の『今昔物語抄』を読んでいる。その中の一つ「玄奘三蔵渡天竺給事」と題する話に、玄奘三蔵が天竺を遊行中に浸淫瘡を病んで死に瀕した人、実は観世音菩薩に出会って、体から滲みでる膿を嘗めとつて救うくんだりがある。そこに「身ノ様テ如泥シ」という記述がある。「様テ」の「テ」は誤写とおぼしい。教室ではその箇所「泥」をどう読むかが問題になった。これはほぼ同文で『打聞集』にも見え、「身ノサマ泥ノ如シ」とある。この話は『今昔物語集』では巻第六の第六語に相当する。山田孝雄博士と三人の子息による〈日本古典文学大系〉の全五冊は、厳密にして詳細な校注で学界の絶賛を浴びたものである。その第二冊に当該箇所を見ると、「デイ」と読んでいる。そして、補注ではその訓の根拠をかなり詳しく説明し、終りに括弧書きで「この項の稿者は、俊雄」とある。わたしの記憶では、ほかに補注の文責を明記した箇所を知らない。過ぐる初夏のあるパーティーの席で、山田俊雄氏にゼミの話をしてその補注について尋ね、あの校注の仕事の一過程を知ることができた。氏によると、「どろ」という語の由来がいま一つ明らかでなかったことも、デイに踏みとどまった理由であったという。

『名語記』巻第三にその「どろ」が二回見える。活字本から左に引いて示すが、初めのトロには朱の声点があり、トは平声の位置に双点、ロは上声の位置に単点である。

水ノ底ノコミヲドロトナツク如何 答 土漏也 又泥ヲヨノ義歟（二六六）

猪カ夏ニナレハカニクハレシトトロニフシコロヒテ…(二〇四)

反切がないのでいま一つはつきりしないが、「ラヨ」は「ラヨ」の誤写で「ロ」を導くのだろう。それでも「ド」の音節は出て来ない。「泥」の漢字音「デイ」の第一音節「デ」を生かすべく、しかし反切にはならないので、「泥ヲヨノ義歟」とおぼめかしたのではないか。それにしても「ラヨ」の反切は何のことか判然としない。そもそも、付属語以外にラ行音で始まる語がないのは固有日本語の頭音法則だから、ラ行音を概念語の反切で説明することは、どだい不可能である。それでも反切を挙げざるをえない著者はさぞ苦しかつたろうと思うが、案外そのような感覚の稀薄な人だからこそかかる著作をなしたのかもしれない。本書のラ行音を解く反切の堂々巡りは、例えば、次の数条、特にその傍線部を見れば十分であろう。

オウキラカ チヒサラカナト詞ノスエニヲケル ラカ如何 答 ラカハレハカカナノ反 ラヤカナ ラヤキハ
ノ反(四三三)

ウスラヤ スキラヤ フトラヤノラヤ如何 答 ラヤハラカヤ也 ラヤカナノ反(四三六)
ホコロフ如何 綻也 ヒロコルヲヨハムノ反(二七九)
ト、ロカ如何 ツヨノラヨカナノ反(一一八二)

泥
「泥」の文字についていえば、名語記の他の箇所にも見える。その一つは巻第五で、「水ノ底ニツ、キタル コ
ミ如何 答コミハクホミチノ反 窪満也 泥ヲハコヒチトヨメリ」(六三二)とある。コヒヂである。巻第六のヒの
二字名語に「臂」と擬声語の「ヒチ」は取りあげているのに、泥の「ヒヂ」は見えず、この語の語性を判断すべ
き手がかりはないが、ヒヂの複合語ウヒヂ・スヒヂは記紀神話で神名に用いられた語でもあり、日本語史上で特

如

に負の価値を帯びていた形跡はなく、平安和歌に「恋路」との掛詞がまれに見られる。したがってコヒヂは、経尊には雅びな語と感じられていたのではないか。そして、ドロが最も普通の語であったのだろう。

平安時代を通じて、語頭に濁音をもつ、亀井孝(一九七〇年)のいわゆる「濁音語」が次第に一般語彙にも現れるようになったが、その語に揺曳する表現価値はおおよそ一様に分かれた。「出す」「どれ」「奪^はふ」など、語頭の狭母音あるいは鼻音を捨てて濁音語に移ったものはさほど負の価値を帯びなかった。それに対して本来語頭に狭母音や鼻音をもたず、語頭の清音が濁音に転じたものは負の価値を帯びることになった。この物語が書かれた時期、土・泥を表わす類義語に、雅語のコヒヂ・ヒヂリコを除くと、固有語としてはまず、ツチ・ヒヂ、陶土のハニ、漢語由来のデイの四つが考えられる。新生のドロがはたしていかなる位置にあつたか、それが問題である。ツチは天(アメ)に対応する語としてあるいは大地・地面の意味で用いられるのが一般である。デイは金泥・銀泥のように仏像の彩色や經典の書写の場面などで用いられることが多く、むしろ高い価値を伴う語であつた。ヒヂは中立的な意味で最も広く用いられたのだろう。わたしたちは庭仕事をして手に付いたものをツチと言ひ、あるいはドロと言ふ。しかし、雨上がりのぬかるみに転んで手に付いたものをツチとは言わない。いまいましい「ドロ」である。平安時代の人たちはそのようなとき、「いまいましきヒヂよ」と呟いたのか、「デイ」と言ったのか。ドロは汚れた醜いものとして負の価値を帯びて用いられるという区別が生まれていたのでなかつたか。

濁音語はいかほど一般化していたのであろうか。本書の声点がいかなる基準で差されたのか、通読しただけのわたしには今のところ見当が付かない。語頭の仮名に濁点つまり双点が差された和語を、目に付いたものに索引を手がかりに拾い出してみよう。オノマトペは除く。

アラ、カナルコトニヅハシタナシトイヘル ツ如何(六三)

勝負ノコトニ持^ヲドロトナツク如何(二六六)

不審スル詞ニドレソトイヘル トレ如何(二七二)

武勇 異治メカシキ輩ノガタクルカラカマシトイヘルガラ如何(二七三)

ウスヤウ色紙^{ナト}ヲダム如何(三三七)

山ノタカキ峯ヲダケトナツク如何 タケハ嵩也(三四一)

モノヲダク如何 タクハイタク也 抱也 懷也(三三九)

シルヘモナクテ人ノモトヲタツヌルヲダテ曠涼トイヘル如何(三四五)

目ニミエヌ物ヲヅラトイヘル詞如何 イツラノイヲ略セル也(三八七)

ガラヲクル如何 カクラス カクレルノ反 クル也 人ニコトハヲカクルヨシ也(五〇五)

母ヲゴ^トトイヘル如何(六一八)

牛ヲシリサマヘユケト思時ハジリトイヘル心如何(七六六)

如 泥
明らかな俗語や牛飼いの語彙は別に考えるべきかも知れない。ダム・ダケは、早く濁音語として日本語の語彙体系に座を占めた特異なものである。ドレソ・ダク・ヅラの類、すなわち元來語頭に持っていた狭母音や鼻音を失つて濁音が露わになった語は、ほかにも多いはずで、差声なしに登載されたものに、ダのタス(出す)、ヅのツル(出る)、デの出・出羽・出歯・出居・出来・出湯・出目、ドのトコ(何処)、それにバに始まる「人ノモチタル物ヲ心モユカスシテトルヲハウトナツク如何 ソレハウハフ也 奪ノ字也 ウヲ略シテハウトハイヘル也」(二三四)の

ハウ(奪う)がある。結局、名語記では濁点が明示された濁音語は、ダ行音が大半で、ガ行音が二つ、ジが一つである。濁点はないが記述から濁音語と判断されるのが右の「奪う」である。

これに対して平安時代末期の状況を、望月郁子(一九七四年)を手がかりに類聚名義抄・色葉字類抄を調べてみると、やはり違つた実態が見える。すなわち誤点とおぼしいものを除くと、バ(場)・バク(媚)・バケ(術)・バフ(纂)・駛(フチムマ)・ベニ(經粉)・ボク(巻)と圧倒的にバ行音に偏り、他の行はガエンズ(肯)・グッサ(蘇)だけである。語頭に濁音の露出することがバ行音に始まつたことは疑いない。それは、語頭濁音を覆っていたのが前唇の狭母音ウないしは鼻音であり、続くバ行音も唇音であつたということ、つまり調音点がほとんど動かなくつたからである。言い換えると、語頭バ行音の入り渡り音の機能を担つていた程度の音であり、その脱落もさほど強く意識されることはなかつたのだと思う。

かくて、現在のところ、ドロについても、名語記が日本語史上の確かな初出例を記録していることになるのである。「辞典」は、「どろ」の初出例に『大鏡』忠平伝の「泥をふみこみて」を挙げているが、これは、山田氏が大系の補注で、漢字表記ゆえ訓の根拠はないとしたものである。その批判にもかかわらずあえてこれを挙げる本意は分らない。今昔物語集の成立は、その説話に表われる実在の人物の経歴を基にして天治年間あたりが上限と言われるから、名語記との隔たりは約百三十年。このドロという語形は、経尊が語源解釈書でその対象にしても違和感のないほど人々の口に上るものになつていたのだろう。しからば、今昔物語集が書かれた時代はどうだつたか。現在通行の注釈を比べてみよう。代表的な用例を大系によつて掲げ、片仮名宣命書きはしない。

- 1 法師、寄リテ病メル者ノ胸ノ程ヲ先ツ舐リ給フ。身ノ膚泥デノ如シ。(六一六)

問題の箇所だが、日本古典文学全集（以下、「全集」と略記）はこの巻を収めず、新日本古典文学大系（以下、「新大系」）は未刊で比較できない。

2 （増賀聖人は乳児のころ、坂東に下る道で馬から落ちる）狭き道ノ中ニ、此ノ児、空ニ仰テ咲テ伏セリ。見レバ泥ヂイニモ不穢ズ、水ニモ不濯ズ疵モ无テ有レバ（十二―三十三）

このくだり、特に雨降りとも雨上がりとも書いてはいない。普通の街道と見ていいだろう。そのような路上に落ちた乳児の体や衣服に付いたものを、院政期の畿内ですう言ったのか。全集はヒヂと読む。新大系はデイと読み、「泥」の訓は後にドロが一般的になるが、この時代は未確認の旨を記す。これは大系の補注のたちばを継承したものとと言える。

3 守、貞任ヲ見テ喜テ其ノ頸ヲ斬ツ。亦弟重任ガ頸ヲ斬ツ。但シ、宗任ハ深キ泥ヂイニ落入テ逃ゲ脱ヌ。（廿五―三三）

前九年の役で、安倍宗任が泥沼に落ちて助かった話。全集はドロ、新潮日本古典集成は付訓しない。

4 燈指、大長者トシテ一ノ泥ヂイノ像ヲ見ルニ、一ノ指落チタリ。（二―十二）

仏の塑像である。大系第一冊の補注に、次の5の「泥形」はドロカタの表記と考えられるとし、「かく読んでも格別新し過ぎるといふ非難は受けまい」としながら「今慎重を期して姑く後者に従う」としてデイの訓を採っている。

5 （犬が与えられた）飯ヲ皆泥形ニ踏ミ成シテ噉シラガフ音ヲ聞テ（十九―三）

第一冊では4の補注のように述べる大系は、この「泥形」には撰集抄・古今著聞集に見えるドロカタと揆を一に

する旨を頭注に記すが、なぜか付訓しない。全集はヒヂカタと付訓し、「泥まみれ。泥だらけ」の頭注がある。大系は「泥」をデイと読むことで通したいように見える。

6 (夫の殺意を察して沼に身を投じた女が) 此ノ沼ノ上ハ泥^デノ如クシテ葦ナド、云フ者ノ生ヒ滋リテ、底ハ遥ニ深カリケルニ、…先ヅ陸ニ上ヌ。身ハ土形ナレバ、水ノ有ル所ニ寄りテ洗フ。(十六一廿二)

「泥」の訓、新大系も当然デイ、全集はドロ。大系は補注で「意識すれば、泥人形のようにであつたから」と記すが、「土形」には付訓せず、全集・新大系ともにツチノカタチ。

7 田ニ立テ検田スル間ニ、見レバ泥^デノ中ニ一尺許ノ地藏菩薩ノ像、半バ泥^デノ中ニ入りタリ、(十七一五)全集はヒヂと読む。ほかに、「泥塔」(十七一廿八)を全集がデイタフと一語で読むのに、大系がデイノタフと助詞を介在させた形で読むのも、大系がデイを自立語と見ていることを示すのだろう。それは「泥」の字をおおむねデイと読むことに繋がると思われる。

以上、今昔物語集における「泥」とその周辺の文字の訓をひととおり見た。全集はヒヂを基本としながら、ほぼ泥沼と断定できそうな3と6はドロと読む方針と見え、7の泥田はヒヂと読んでいる。ただ読み分けの根拠は明らかにしていない。大系はデイで通すように見えながらも、5・6の扱いが曖昧である。

わたしは、5の「泥形」と6の「土形」に解決の手がかりが求められるように思う。「日本書紀」神代上の神名「涅槃尊」に付けられた訓注「于毘尼」以来、高山寺本『和名抄』遠江国城飼郡の郷名「土形比知多」、観智院本『類聚名義抄』の「泥ヒヂ」などによって、古代以来、泥・土ともにヒヂの訓を持ち続けたことに疑いの余地はない。『古今著聞集』第二十巻に、縁浄法師が詠んだ歌「しろ馬はとろかたにこそなりにけれつちあしけと

やいふへかるらん」があり、先立つ地の文に「あしけなる馬とろかたになりたりけるを」と見えるので、傍線部が「どろかた」の表記であることは動くまい。『撰集抄』の方は、松平本卷一の三「かしら面より始めて足手とろかたにて気色浅猿きか」の傍線部が、書陵部本・静嘉堂本も同じである。成立時期と作者の点で問題はあがあるが、ともかく「どろかた」の存在は認められる。平安時代の日本語で泥まみれの状態はヒヂカタであったが、語頭音が殖えてくるにつれて、その不快感を表現すべく擬声語のドロを用いられるようになったことは十分に推測できる。それでもしばらくの間はヒヂとドロが共存したであろう。今昔物語集はその時期に書かれたのだ、そうわたしは考える。今昔物語集の編者は新語のドロカタを用いることをためらい、まだ十分な活動力をもつヒヂカタを選んだのであろう。

固有の日本語に濁音語はなかった。この事実は動くまい。しかし萬葉集巻第五の貧窮問答歌で、山上憶良がなぜを引いた貧者の姿を「鼻毘之毘之尔」と詠んでいるのは周知のことである。わずか一例に過ぎないが、これはオノマトペが頭音法則の外にあつたことを雄弁に語っている。したがって、古代の日本人が、ほどよい柔らかさになつた葛湯の状態と、道がひどくぬかるんだ状態を同じ擬態語で表現したと考えるのは現実的ではない。当然、語頭音の清濁の別によるトロトロとドロドロを使いわけたに違いない。「泥」がドロの訓を獲得するきっかけがあつたか、残念ながらそれは定かでない。濁音語が殖えて行く時代の趨勢に乗つたものであろうか。

結局、大系が「ドロの如し」と読まないのは正解であつたと思う。しかし「デイの如し」の訓は、以上に述べたように同じがたいのである。なお、今昔物語集の表記原則からして、著者に新語のドロと読ませる意図があつたら、「泥」と漢字表記せずに片仮名で書いたはず。大系の補注はそれをはっきり指摘すべきだつたと思うが、

自明のこととしてか省かれた点がいささか不満である。この問題をめぐって、山田氏には別に周到な論文（一九五八年）があるからである。この不満が全集に対していつそう強いことは言うまでもない。

ちなみに、名語記巻第三の「ドロ」の項に続いて、「トロ」の項目が「心ントロシテイヘル トロ如何 コレモカタノトモナクテ土漏ノヤウナルライフ歟」（一六六）と見える。人間の精神のありようを土壌の状態に類推して説明するものである。そして、トロメイトルの核となる動詞「とろめく」の解釈が巻第九にある。「トロメク如何 答 小手トロハトケヲヨノ反 テロヲトロイヘル也 又云 土漏ノ義歟」（一一八〇）。これらの記述を見ると、著者が擬態語トロと泥のドロにある種の関連を感じていたように思われる。

おわりに

泥にかかわる文字と言葉をめぐって、わたしには忘れられない三つの記憶がある。

十三年前、わたしは岐阜の町外れに小さな家を建てた。山裾の石だらけの土地であった。庭に芝生を貼りたいと思って業者に段取りを頼むと、これこれの日に「ドロを運んで行く」という連絡を受けた時、泥を運び込まれるのは鬱陶しいことだと思つた。当日運ばれてきたのは、綺麗に乾いた黄色い土で、地元ではサバツチと呼ぶものであった。そこでわたしは、岐阜では乾いてもドロということを知つたのである。それは、古代人がヒヂという言葉で土の様々の状態を指し得たようなものであろう。

もう四半世紀の昔、公害という言葉がマスメディアを賑わしていた経済の高度成長期のこと、突然「ヘドロ」

という言葉が飛び交うようになった。それはわたしには全く新しい言葉であった。きっかけは田子の浦港、工場の排水に含まれていた淤泥が、長い年月にわたって沈澱したものをそう称したのである。ヘドロという言葉は、平凡社の『大辞典』に神奈川県津久井郡の方言として載る以外、普通の辞書には見られなかったものである。いま日本では、新しく生まれた言葉でもたった一日で全国の共通語になる、テレビジョンの電波に乗って。国語辞典をひもとくとヘドロはしっかりと市民権を得ており、『広辞苑』は第三版から載せている。『現代用語の基礎知識』は一九七一年版に初めてヘドロの語を載せ、翌年版から「公害問題用語の解説」の章を建てている。『日本国語大辞典』は、文献からは佐藤春夫「田園の憂鬱」の「へどろの赭土を晒して」を挙げ、『日本方言大辞典』によると、名古屋、神奈川県津久井郡、奈良県宇陀郡宇陀の方言としている。佐藤春夫は和歌山県新宮市の出身、田子の浦は静岡県、右の方言の行われる地域の近隣といっている。ドロではまだ物足りない不快感を、擬態語のベトあるいは臭い物としての「へ」を被せることで表わそうとしたのだろうか。

寛政九年二月、出雲の藩主松平不昧に寵愛せられた指物大工小林安左衛門は、剃髪を命ぜられ、如泥の号を授かる。石川淳の『諸国崎人伝』によると、如泥の号は唐詩の一句「笑殺山翁醉如泥」に由来するという。その号のように、飲み方も酔い方も豪快だったのだろう。深夜ひとり仕事場にこもってひとの近づくを禁じ、銘をとどめず弟子とらず、工程の跡を残さぬその仕事ぶりは、わたしの最もあらまほしき職人の姿である。如泥の芸に接したいと久しく願いながら、わたしはまだ果たしていない。

この「如泥」という語は、泥酔状態の意味から来るのだろう、だからしないという意味で、古代後期から中世にかけて漢文日記のたぐいに見ることができるといえる。この語はまた名語記にも見える。

下人ノ如泥ナル マメナルナトイヘル マメ如何(五五七)

下藪ノ如泥ナルヲ精好セラレテ フチくトフチメク フチ如何 フチハフツ也 フツノ所ニアルヘシ 但フチハクタリノ反(五八〇)

いずれも下人・下藪に絡んで用いられているが、辞書的な意味の「怠慢、だらしない、ぐず」などがそのまま適用できそうである。不味が安左衛門に如泥の号を与えたときは、もうこのような意味での用法は忘れられていたであろう。如泥の極みのようなわたしも、その下藪のように人間で精好せられ、少しはふちめくべく努め、小林如泥のように後世に残るものの一つでも書きたいものである。もつとも、そのフチメクがまた他に所見のない語で、フツの箇所にも説明がなくて明解を得ないのだが。

(一九九四年一〇月二八日)

文献

- 漆崎正人(一九八七年) 「孤例の扱ひ・『名語記』の『ナメク』の場合から」(藤女子大学国文学会雑誌 39号)
- 岡田希雄(一九三五年) 「鎌倉期の語源辞書名語記十帖に就いて 上中下」(国語国文 第五卷11~13号)
- 亀井 孝(一九七〇年) 「かなはなぜ濁音専用の字体をもたなかったか——をめぐってかたる」(人文科学研究 12号)
- 工藤力男(一九九三年) 「名語記私解」(岐阜大学国語国文学 19号)
- 中山緑明(一九八五年) 「『名語記』の文法意識」(立教大学日本文学 58号)
- 西田直敏(一九八八年) 「『名語記』掲出の助詞助動詞語彙」(北大国語学講座二十周年記念論輯辞書・音義)
- 望月郁子(一九七四年) 「類聚名義抄四種声点付和訓集成」
- 山田俊雄(一九五八年) 「表記体・用字と文脈・用語との関連——今昔物語集宣命書きの中の特例に及ぶ覚え書——」(成城文藝 15号)